

新版教科書でこんな授業をしたい

新しい学習指導を考える会

書いて 知らせよう

二上「かんさつ名人になろう」

1 この教材でこの力をつけさせる
「かんさつ名人になろう」は、身近なものを観察し、相手に伝わるように書き表す教材である。

この教材で主に身につけさせたい力は何か。それは、感覚を表す表現のしかたを使って書き表す力である。

感覚を表す表現のしかたには、例えば、次のようなものがある。

- ・色（赤い）、形（丸い）、のようない、大きさ（小豆くらい）、数（三つ）、動き（くねくね、のようない動き）
 - ・音（パキッ、ガサガサ、ドン）
 - ・におい（おいそうなのようないにおい）
 - ・触った感じ（硬い、軟らかい、温かい、冷たい、ぬるぬる）
 - ・味（あまい、すっぱい、のようない味）
- これらの表現のしかたは、書き表すときにだけ使われるものではない。一つ一つが、身近なものを観察するときの観点となる。これらを意識させて、色はどうか、音はどうか、触った感じはどうかと、対象をじ

つくり観察させることが、書き表す力を身につけさせることにつながる。

2 力をつけさせるために二つ指導する
感覚を表す表現を使って書き表す力を身につけさせるために、大きく次の二段階で指導する。

対象を観察させ、絵をかかせる。

感覚を表す表現のしかたを意識させ、それを観点として対象をじっくり観察させる。そして、観察したことをもとに絵をかかせる。絵をかくことで、子どもは対象の細かい点にまで目を向ける。

その後、色、音、触った感じなどを短い言葉で書き込ませる。

絵を見せながら観察したことを話させ、工夫点や改善点を話し合わせる。

三、四人の小集団を組ませ、かいた絵を見せながら、観察したことを話させる。ここで、子どもは、絵にかいたことを周りの友達に伝えようとする。友達に伝えるためには、対象の様子を詳しく話さなければならぬ。そのために、絵に書き込んだ言葉

だけでなく、比喩や擬声語・擬態語なども使って話すようになる。

その後、工夫点や改善点を話し合わせる。友達に認められた工夫点は、書くときに生かすようにさせる。また、指摘された改善点は、具体的な言葉で絵に書き加えさせ、文を書くときの参考にさせる。

話し合いで出された工夫点や改善点をもとに、観察したことを書かせる。

観察したことが相手に伝わるようにまとめさせる。子どもは、かいた絵と話し合いで出された意見をもとに、感覚を表す表現を使って書き表す。

その後、互いに読ませ、よいところを見付けさせる。友達に認められることで、子どもは、表現のしかたを観点として観察するよさを実感する。そして、次も、感覚を表す表現のしかたを使って書きたいという意欲をもつ。

17年度版「二上
「かんさつ名人になろう」p.28



17年度版「二上
「かんさつ名人になろう」p.30より



伝え合って考えよう

五上「人と『もの』とのつき合い方」

1 この単元をこんなふうにとらえる

実生活においては、話す・聞く・書くといった言語活動は、関連して行われている。

しかし、国語科の授業においては、作文なら作文だけ、スリッチならスリッチだけといった、取り立て指導が多くなされている。これが、子どもたちが授業で掴んだ知識や技能が実生活の場で十分に活用されていない要因の一つである。わたしは考えている。

本単元は、資料「ごみ問題」について、なかに「をもとに、自分なりの追究を進めて発表し、さらに友達の感想などを踏まえて自分の生活を振り返る作文を書く」という構成になっている。

また、注目したいのは、発表の後に作文が位置づく構成となっている点である。発表したことをもとに新たに文章を構想するなかで、自分の考えを見つめ、深めるのである。

2 この単元で身につけたい力

○発表者の考えと自分の考えを照らし合わせながら聞く。

○自分の考えを、経験や知識や友達との

話し合いを通して深め、組み立てを考えて書く。

3 こんなふうな指導をしてみたい

テーマを「ごみ問題」以外に広げる「ごみ問題」については四年生社会科の授業（もしくは、それと関連した総合的な学習の時間）ですでに学習している可能性が高い。したがって、「ごみ問題は子どもにとって新鮮な刺激となりにくく、単元を貫く追究意欲を与えることができないのではないか」と考える。

わたしは、教科書の資料「ごみ問題」について、のほかに、ものの由来などに関する資料を提示したい。その際に心がけたいのは、クラスの子どもたちが共通のテーマ意識をもって調べ、発表するなかで、互いの意見を参考に自分の生活を見つめ直すことができる内容であることである。

「トリビアの泉」の要素を取り入れる人気TV番組「トリビアの泉」には、情報伝達の観点から学ぶことが多い。

まず、扱われる情報が意外性に富むこ

対比を促す

子どもが、調べた事柄をもとに友達の発表も参考にして自分の生活を見つめ直すためには、友達の意見と自分の考えを対比することが有効である。そこから浮かび上がってきた考えや意見をもとに、「たいせつ・書いて考えを深める」を参考に、文章にまとめさせていきたい。

とである。また、「へえボタン」による評価システムが単純でだれにもわかりやすいことである。さらには、伝えるべき情報を中心的な証言と補足説明とから伝えていることである。

発表会には「トリビアの泉」に見る優れた要素を取り入れたい。

発表に際しては、調べたことを「一つの事実から述べるのではなく複数の情報を説明すること」、また「複数の情報を並列的に扱うのではなく、中心事例とその補足から構成すること」を指導したうえで発表の準備に当たらせる。

また、聞き手による評価は、発表を聞きながら「なるほど」と感心した点がほかの人と一致した時点で随時加算する方式をとる。評価の最高点を二十点とし、情報の新鮮さ以外にも組み立ての工夫や発表態度に対して優れていると考えれば加算していく。友達の発表は自分の考えを深める材料となるので、楽しむだけで終わりにならないようにメモなどをとらせたい。



三年生で習った漢字

四上・下「漢字の広場」～

1 この教材の価値

絶対評価の導入により、基礎学力の定着が重視されている。特に漢字の学習は評価しやすいので、その習得状況が注目を集めている。学習指導要領の「言語事項」内には、次のようにある。

「（前略）当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書くようにすること。」

漢字の知識を定着させるためには、学習を繰り返すことが必要である。しかも、その学習は機械的な暗記ではなく、漢字を文中で実際に使いながら、その意味を覚えることが大事である。「漢字の広場」は、そうした繰り返しの指導が行いやすい教材である。

ここでは、漢字の羅列ではなく、絵の中でそれぞれの漢字が意味をもって提示され、しかも、前学年の漢字を集中して扱つことができるように構成されている。

① 前学年の漢字を正しく読み・書く。

② 前学年の漢字を文や文章の中で使う。

六つの教材は、いずれも次のような課題

を提示している。

「（絵の中の言葉を使って）文章を書きましよう。」

この課題は、漢字を「文や文章の中で使う」ことをねらっているのである。どんな文章を書けばいいかについては、「銀行のつらに、おいしいいやきの店があります。いつも行列ができています。」などの「例」が示されている。それらをうまく使うことで多様な学習活動が成立し、①②という力をつけることができると思われる。

2 「確認する活動」を楽しく組み合わせる
以下、「漢字の広場」を例に、学習のねらいを達成するための活動を説明する。

まずは、「漢字を正しく読む」活動である。グループ、隣どつし、あるいは一人ずつ順番に、絵の中に書かれている漢字を声に出して読ませる。次に、教材の「れい」に倣つて、口頭でその絵を説明させてみる。最初は教師が一つの例を示すとよい。

『銀行』のつらに、おいしいいやきの店があります。」

そして、「銀行」という言葉を丸で囲ませ

る。自信のない子どもには、読み仮名を書かせる。絵の中のすべての漢字に丸が付くまで、これを繰り返す。

すでに三年で「へん」や「つくり」を学習しているので、「さんずい」の付く漢字を選んで丸で囲ませ、「水」に関係があるね」などと復習させてもよいかもしれない。

次に、「漢字を正しく書く」「漢字を文や文章の中で使う」活動である。単に漢字を使うだけでなく、書いた文や文章を確認する活動を設定する。この確認をするうえで、前述のような力をつけることができる。

そのためには、クイズ作文を書かせてみたらどうだろう。

例えば、次のようなクイズ問題を書かせる。
『銀行』のつらに、おいしいいやきの店があります。店には何ができていますか。
解答は、「行列」となる。

このように、子どもたちには、答えていくことで、ある一つの言葉になるような問題を作らせることを薦めたい。ある程度の数の問題が書けたら、ノートまたはプリントを子どもどつしで交換させ、解答を記入させる。こ

のとき、正しく書けているか楽しみながら確認させる活動を設定したい。

3 さらに多様な活動を

「漢字の広場」は、優れた教材であるので、いろいろな学習活動が可能である。例えば、提示されている漢字を使って長い文章を書く。その文章を子どもどつしで交換して、絵の中の漢字を何個使ったかを競つなど、楽しい活動を設けたい。

そうした活動の後には、ミニテストなどをするので、「漢字の定着」というねらいをぜひ十分なものにした。

